

竹内さんのウクライナ便り(最終回)

昨年10月末のウクライナ最高会議選挙の結果は、日本でも報道された通り、大統領の与党「地域党」が議席の4割を占め第一党となる結果でしたが、連立相手の共産党の議席を合わせても過半数には満たず、また新たな野党としてボクサー・フリチコ氏の「打撃党」(正式名称は「改革を目指すウクライナ民主連合」で、頭文字をあわせるとウクライナ語で「打撃」を意味する「ウダル」となる)、民族主義政党の全ウクライナ連合「自由」が登場。ことに、党員が折々反コダヤ主義的な発言をするなど過激な傾向の「自由」が、8%ほどの議席を得たことについては、「従来の政治家に幻滅した国民の批判票を集めたもの」と独立系のメディアでは分析されています。なんだか某国の最近の選挙結果に似ているような…。

新内閣は、大統領の家族と親密な人物や、地域党の影の実力者であるウクライナーの富豪アフメートフ氏に近い人物で固められているものの、議会の運営は早くも波乱含みで進んでいます。

また収監中の前首相ティモシェンコ氏の、刑務所での劣悪な待遇による健康状態悪化や、同氏の別件(1996年に起こった実業家・政治家シェルバニ氏殺害事件への関与の疑い)での起訴など、相変わらず政治がらみのスキャンダラスな報道に事欠かないウクライナです。

ところで、私は一身上の都合により、3月にウクライナを離れ、妻とともに私の郷里の岡山市に移ることになりました。「救援・中部」のお手伝いは従来のように続けさせていただくつもりですが、それで、この「ウクライナ便り」も今号で終わりとなります。長きにわたり拙文をお読みいただいた読者の方々にお礼を申し上げます。今後はるか岡山から、ウクライナ社会の変動を見届けていくつもりです。

ウクライナを去るにあたって、以前から一度は行きたいと思っていた、ルーマニアとの国境に近く近いチェルニウツィを、正月の休みに妻と訪ねてきました。

18世紀から第1次大戦まではオーストリア-ハ



<コプリャンシカ博物館にて、館長と妻と>

ンガリー帝国の一部で、19世紀末から20世紀初めにかけて興味深い小説を残したウクライナ語作家オリハ・コプリャンシカが住み、20世紀のドイツ語詩人中5指に入るパウル・ツェランの生まれた、現在人口26万人弱のこぢんまりした州都。

30年前の学生時代に、故生野幸吉先生の講義でツェランを読んだ私は、一度、かつてはドイツ語でチェルノヴィツツと呼ばれたその町のたたずまいを見てみたかったのです。

ウクライナでも文学は流行らないご時世のようで、私が妻と訪れたコプリャンシカ博物館は、館長が私たちのガイドを懇切丁寧に務めてくれた小一時間ほどの間、土曜の午後でしたが他の訪問客が誰もおらず、貸し切り状態でした。ツェランの生家は、入口の傍らに記念のプレートがあるものの、ぼろっと古びたままの状態に残っており、その近くのツェラン通りに彼の記念碑があるだけでした。ナチス・ドイツの占領中にコダヤ人の両親を強制収容所で失い、戦後は長くパリに住んでドイツ語の詩を書いていたツェランは、ウクライナではまだまだ知られざる詩人なのでしょう。チェルニウツィ大学のドイツ文学研究者リュフロ氏が、ツェランのウクライナ語訳や紹介に尽力しており、またウクライナの著名な詩人何人かが、やはりこれまでツェランの翻訳を手がけているようですが、でも、私としては、ツェランが生まれ育った1920~40年頃にはコダヤ人・ルーマニア人・ドイツ人・ウクライナ人などが共存していたというこの町の雰囲気や、少し感じただけでもうれしかったです。それではごきげんよう、またいつかどこかでお目にかかりましょう。(1月22日)